

中高生に応物分野の魅力を伝えるには ～理科の教職課程制度の現状と課題～

How to convey the appeal of the applied physics to junior and senior high school students?

～ current status and issues of the teacher-training system in science ～

青学大理工 ○黄 晋二

College of Science and Engineering, Aoyama Gakuin University

E-mail: koh@ee.aoyama.ac.jp

日本の研究力低下がさまざまな形で指摘されているなかで、今後より一層の少子化が進むとされる日本において、将来の研究を支える人材を確保することが重要な課題となっています。当然、応用物理学会に関わる者として、応用物理学を学び、この分野の研究者を志す若者を増やしたい、と思うわけですが、では一体どうすればよいのだろう？ と考え始めたことをきっかけに、機関紙『応用物理』に掲載した焦点の記事「応用物理学会は理科教員を輩出しているか？」^[1]の執筆にたどり着きました。

この焦点の記事では、将来を支える中学生・高校生の理科教育に目を向け、どのような学問分野の人たちが彼らに理科を教えているのか？ という観点から、「理科教員」になるための「教職課程制度」に焦点を当てました。記事では、教職課程制度の概要を紹介し、その課題をあぶり出すを試みましたが、現状の教職課程制度では応用物理学分野を含めた工学系分野出身の理科教員が生まれにくい、という重要な問題が浮き彫りになったのではないかと考えています。

本講演では、『応用物理』に掲載された記事の内容に沿う形で、現状の教職課程制度の問題について解説します。本講演が、応用物理学会員の方々が教職課程制度の問題に目を向けることのきっかけに、および、未来の理科教育に向けた制度改革の議論が始まるきっかけになることを願っています。

[1] 「応用物理学会は理科教員を輩出しているか？」黄晋二『応用物理』88巻1号(2019).